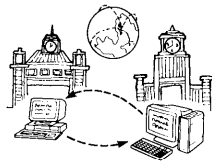
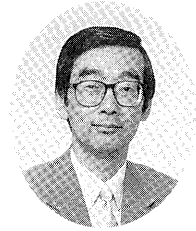


巻頭言



独 創 性 再 訪

村 岡 洋 一†



日本からの独創的なアイデアの発信は少ないという。本当だろうか。任天堂があるではないか、「マリオブラザー」はどうだろう、東南アジアでは「ドラえもん」だってがんばっている。アジアで不満足なら、アメリカでは「キティー」ちゃんだ。ディズニーショップに攻め込まれているのに対して、サンリオショップが善戦しているではないか。

とはいっても、やはり正当な情報処理の分野での独創的な成果が欲しいということだろう。どうすれば、それらを発信できるようになるだろう。

昔筆者がイリノイ大学の計算機学科にいた頃、4人のOfficemateとオフィスを共用していた（という個人的な話しかから始めることをお許し頂きたい）。

その一人、Steve Chenはコンパイラ関連の博士論文を書いた。学生の時代には、ICのANDゲートとORゲートの区別もつかなかったことは間違いないと思う。その彼が、Cray社のスーパーコンピュータのトップアーキテクトになった。

Bob Wilhelmsonは、これまたコンパイラの修士論文を書いていた。いよいよ書き終えて、Ph.D.のアドバイザーを選ぶ段になって、半年ほど顔を見せなくなったと思ったら、ある日やってきて、自分は気象学者になるんだといって、学部を代わって一からやりなおして、現在は竜巻研究の第一人者になった。

Paul Badnikは、その当時から数学に没頭していて、私には今もってよく分からないけれども、Recursive Theoryの再構築をするのだといって、今でもこれを生涯のテーマにしている。

Dave Goldは名前のようにユダヤ系で、Ph.D.を

とったらすぐ投資コンサルタントになり、今ではそれで巨額の富をなしている。

すなわち、4人とも正当な（その定義はさておき）Computer Scienceの教育の直接の恩恵は受けなかったことになる。

この4人で足りなければ、よくある話しは、有名ななんとかプログラムを開発した学生のなんとかさんは、いわゆる授業の秀才ではなかったということである（具体的な事例は、ご本人のプライバシーにかかわるので、ここにはあげない）。

ということで、学校の教育が必ずしも独創性育成に直接的な形で寄与しているのでもなさそうだ。しかし、そうはいっても、独創性あふれるアメリカの学生は、広い意味でのアメリカの教育の恩恵をなんらかの意味で受けていることには間違いあるまい。

学生の意見を聞いてみようかということで、日本の独創性というテーマでレポートを書いてもらったら、これがまた見事に全てステレオタイプのものばかり。なにか面白いことを書いてみようという気概さえ見られない。アメリカの授業を思いだしてみると、多分学生は皆意地でも他人と違うことを書いてきたのではないだろうか。

それでは、偏差値が悪い、ホモジニアスな民族環境のせいだといっても始まるまい。また、最初に述べたように、皆で独創性がないといって、自虐的になっても、これまたマンガチックだ。

ということで、学会も何か役に立てばいいのだが、何をすればいいのだろうか。残念ながら解はうかばなかった。もっとも巻頭言として「読者自ら考えられたい」というのがあっていいだろう。

（平成7年7月24日）

† 本会研究会担当理事 早稲田大学